

《史料翻訳》

アブド・アッラフマーン・アッサアディー 著

# 『スーダン年代記』

内田 あかね

野口 舞子

訳

## 一 解 題

(1) 本書と著者<sup>(1)</sup>

本稿は、全三十八章から成る『スーダン年代記 *Tarikh al-Sudan*』の翻訳である。『スーダン年代記』は、一七世紀中葉に、トンブクトゥ出身の知識人アブド・アッラフマーン・アッサアディー、Abd al-Rahman al-Sa'di (一五九四—一六五五・六年以降没、以下サアディー) によって著された。

著者については、彼のニスバが示す通り、アラブのサアド族出身者であった<sup>(2)</sup>。その家系は、彼の数世代前からトンブクトゥに移住したとされる。彼の幼少期については殆ど知られていないが、一六二六・七年にはジェンネ近郊<sup>(3)</sup>のベナのサン

コーレ・モスクのイマーム職に、その後、ジェンネやマースィナの軍人支配者層アルマ<sup>(5)</sup>の行政官に登用され、一六四六年にはトンブクトウのアルマの行政官長に就いた (p. xiii)。

『スーダン年代記』は、西アフリカの広大な領域（現在のセネガル、ギニア、マリ、ナイジェリアからサハラ南縁をふくむ）を有し、北アフリカとの交易を支配することで繁栄したソンガイ帝国ついて、一五世紀半ばの興隆期からヒジュラ暦一〇〇〇／西暦一五九一年（以下併記の場合は／で区切る）の滅亡までの歴史と、帝国崩壊後のトンブクトウのパシャ（総督）の歴史を一〇六六／一六五六年まで記す。また、トンブクトウの学者列伝やニジェール川中流域の状況など、著者の同時代情報を豊富に含む。ソンガイ帝国の同時代史料としては、当該書に加えて、マフムード・カアテイ Mahmūd Ka'itī (一四六八一—一五五二または一五九三年没) による年代記 *Ta'rikh al-Fattash* がある<sup>(6)</sup>。いずれもスーダン西部の歴史研究にきわめて大きな価値をもつ年代記史料である。

サアデーの叙述に関して、後述する英訳者のハンウィックによれば、サアデーはアラビア語で記述したが、おそらく彼の母語や話し言葉はソンガイ語であり、その文章スタイルは「優雅さに欠け、アラビア語文法上の誤りもあり、モロッコ方言も含む」ものとなっている (p. xiv)。さらに、ハンウィックは文章の多くが、（主語を明示せず）三人称男性単数で書かれているために、誰が、誰に言った事が明らかにすることが少々困難であると指摘する。これについては、訳者も度々困惑させられた。

## (2) 訳書

同書については、フランスの民族誌学者のオクターヴ・ウダ Octave V. Houdas によって一八九八年にアラビア語校訂が、一九〇〇年に仏訳がパリの Ernest Leroux 社から出版された。ウダは、もう一つの同時代史料『探求者の年代記』の校訂と翻訳も娘婿のモリス・ドゥラフォス Maurice Delafosse とともに刊行した。ウダの訳書は一世紀以上の長きにわたり、

信頼に足るものとして参照されてきたが、一九九九年には、西アフリカ・イスラーム研究の第一人者であるハンウィックによって英訳『トンブクトゥとソンガイ帝国』が出版された。この著作は『スーダン年代記』以外の史料訳も適宜加えられ、最新の成果が反映された研究書でもある。ただし、同著は第三〇章まで（うち第二八、二九章は除外）を対象としているので、ソンガイ帝国崩壊後に関しては、今後も仏訳が参照され続けるだろう。

このような訳書の状況を踏まえ、本稿ではソンガイ帝国が崩壊した第三章以降を邦訳することとした。訳出に際しては、ウダによる校訂の『スーダン年代記』を本とした<sup>7)</sup>。本来であれば、写本を全て参照した上で訳出すべきであるが、ハンウィックによれば、ウダの校訂は修正すべき点があるものの、総じて写本間の異同は少なく、人名や地名といった固有名詞の表記に幅がある程度のものである<sup>8)</sup>。また、各国に点在する写本にアクセスすることが出来なかった。このため、本稿は現段階の暫定訳としたい。

なお、本邦訳は、内田あかね（故人、二〇〇〇年二月二十五日逝去）が作成した訳（遺稿）に、野口舞子が加筆・修正したものである（追記を参照）。本稿では第三章から第三三章までを訳す。アラビア語の意味が不明な箇所は、仏訳を参照し、適宜語句を補った。なお、ウダの仏訳については、二〇世紀前半のフランスの民族学者・言語学者シャルル・モンテイユ Charles Monteil が生前に検討して注釈を作成しており、没後、息子で東洋史学者のヴァンサン・モンテイユ Vincent Monteil がそれらを編集して出版したため<sup>8)</sup>、訳出に際してはそれらも参照した。

## 二 歴史的背景<sup>9)</sup>

### （一）スーダンとソンガイ帝国<sup>10)</sup>

本書が対象とするのは、スーダン西部に興ったソンガイ帝国と、帝国崩壊後のトンブクトゥのパシャの歴史である。

スーダンとは、ビラード・アッスーダン *Biḥād al-Sūdān* (スーダンの地、すなわち「黒人たちの地」) を意味し、サハラ砂漠以南のサバンナ地帯であるサヘルに沿うように大西洋岸から紅海岸へと東西に広がった带状の地域を指す。これらのうち、スーダン西部とは、大西洋からニジェール川湾曲部までの地域をいう<sup>(1)</sup>。地理的には、トンブクトウ、ジェンネ、ガオなどの都市が含まれ、歴史的には、ガーナ王国、マリ帝国 (一二三〇?—一五九九?年)、ソンガイ帝国などが成立した。

ソンガイ帝国は、ニジェール川流域に居住した民族集団ソンガイ (ソンライ) が一世紀初頭にガオを中心に築いた国家が起源とされる。一三世紀後半ころに興ったスンニ朝は、マリ王国の属国の地位にあったが、一五世紀半ばのスンニ・アリー *Sūnnī 'Alī* (またはソンニ・アリー *Sūnnī 'Alī* 位一四六四—一四九二年) の時代にこの支配から脱し、最盛期を迎えた。しかし、彼の死後の一四九三年、配下の武将だったアスキヤムハンマド *Askīya Muhammad Ture* (位一四九三—一五二九年) がアスキヤ朝を打ち立てた<sup>(2)</sup>。アスキヤムハンマドはメッカ巡礼も行い、帝国の勢力圏を拡大すると共に、宗教・交易を保護した。しかし、一五八〇年代に入ると、疫病、旱魃、洪水などの災害が相次ぎ、内乱も生じて荒廃していく。そしてアスキヤムハンマド二世 *Askīya Muḥammad II* 治下の二五九一年には、モロッコのサアド朝の軍事侵攻を受け、同朝は滅亡する。アスキヤムハンマド二世の兄弟であるヌーフ *Nūf* はダンディイから抵抗運動を続けるが (ダンディイ王朝ともいう)、これ以後、スーダン西部は政治的な分裂を迎え、マリ帝国やソンガイ帝国のような広域で多民族を包含する帝国は誕生することはなかった。なお、マリ帝国とソンガイ帝国下で交易・宗教都市として成長したトンブクトウも、これらの帝国の衰退に伴い、一七世紀以降は衰退した<sup>(3)</sup>。

## (2) モロッコとサアド朝<sup>(4)</sup>

この時代のモロッコは、一四世紀初めにアラビア半島から移住してきたシャリーフの家系を自称するサアド家によって

創始された、サアド朝（一五四九—一六五九年）の支配下にあり、首都はマラケシュに置かれた。当時、モロッコは、キリスト教諸国とオスマン朝の緩衝地帯に位置したこともあり、同朝は両者と戦ったり同盟を結んだりしつつ独立を保ち続けた。こうした中、サアド朝は、一六世紀半ばにはスーダン西部にまで覇権を拡大しようとし、サハラ砂漠の南縁にある塩鉱タガーザを押さえた。アフマド・アルマンスール Ahmad al-Mansūr（位一五七八—一六〇三年）の時代には最盛期を迎え、さらに南下したタウデニ塩山への進出を目論んだが、この背景にはポルトガルの進出とオスマン朝の侵攻があった。同朝は一五九一年に遠征軍を派遣し、ソンガイ帝国を滅ぼし、トンブクトゥとジェンネを支配下に置いた。これによつて、同地の金と塩田、そして交易ルートを支配し、黒人奴隷を獲得することになり、財政は潤された。しかし、アフマド・アルマンスール没後、スーダン西部をみすてたサアド朝も、経済的基盤を失うこととなり、急速に衰えていった。

### （3）スーダン西部の統治<sup>5</sup>

一五九一年の征服以降、サアド朝はスーダン西部の統治の拠点をソンガイ帝国の首都ガオではなく、トンブクトゥに移した。そして、現地の傀儡のアスキヤを擁立しつつ、サアド朝からもトンブクトゥにパシヤを任命、派遣した。しかし、一六一二年以降、マラケシュのサアド朝内の内紛によりスルターンが統治を放棄し、一六一八年以降パシヤはマラケシュから派遣されなくなり、現地のトンブクトゥで自主的に選ばれ、統治も現地の駐屯軍に任された。このため、トンブクトゥでは略奪と破壊が支配し、同地は衰退していった。

サアド朝のスーダン西部からの段階的な撤退後も、トンブクトゥのパシヤはサアド朝スルターンに忠誠を誓い続け、金曜礼拝のフトバも同朝の支配者の名で行われた。また、サアド朝スルターンも即位の知らせをトンブクトゥのパシヤ、ガオとジェンネの守備隊長に送っていた。本国の支えを失ったパシヤの権力は限られたものならざるを得なかったが、

トンブクトゥとジェンネという、ニジエール川水運の要衝に位置した交易都市を支配し続けながら、モロッコの名目支配は一八三三年まで続いた。その間、サアド朝軍の残りとその子孫は現地のソングアイとの混血を繰り返し、その子孫はソングアイ・アルマと呼ばれようになった。

### 三 翻 訳

#### 凡 例

- ・ テキストにない単語を補う場合は「**〔**」、単語の説明は（**（**）、アラビア語頁数は【**】**を使用した。
- ・ 段落は仏語訳に従った。
- ・ 仏語訳末に記されている正誤表は、断りなくそのまま反映した。また、モンティユの仏訳注釈も適宜反映した。

#### 【二二〇】第三章

アリー・ブン・アブド・アッラーフ・アッテイリムサーニー *ʿAlī b. ʿAbd Allāh al-Tīmīsānī* がパシヤに就任した日付については既に述べたが、彼は一〇二二年光り輝くシャアバーン月一五日本曜日朝に（西暦一六二二年一〇月一日<sup>(17)</sup>）就任した。彼が就任してから物事は変わり、状況は変化した。災難と前代未聞のことばかりが起き、それは今日まで続いている。

反乱者アブー・マハッラー・サイイド・アフマド・ブン・アブド・アッラーフ・アッスーラー *Abū Mahallī Sayyid Ahmad b. ʿAbd Allāh al-Sūfī*<sup>(17)</sup> が、アミール・ムーレイ・サイダーン・ブン・アルアミール・ムーレイ・アフマド・マウラー *Zaydān b. al-Amīr Mawlay Ahmad*<sup>(18)</sup> の追放後、トンブクトゥの人びとに書簡を送ると、パシヤ・アリー・ブン・アブド・アッ

ラーフは、トンブクトウの町にいる軍に、アブー・マハッリーにバイア (bay'a 忠誠の誓い) を行い、アミールとするよう求めた。

そこで彼らはこれに応じ、パシャ・アリーに同意した。しかし、彼のもとを離れるや否や、彼らは正気に返った。そして、彼の求めに応じ、同意したことを悔やんで、拒絶した。

パシャ・アリーは、彼らが自らの要請に応じなかったことを知ったが、アミール・ムーレイ・ザイダーンへのバイアを破棄し、反乱者 (アブー・マハッリー) アッスーリーにバイアを行った。そして彼がバイアを行うと、軍も、彼にバイアを行った。ジェンネの人びと (軍) も、彼らに続いてバイアを行った。

そして、六カ月が経った。すると、サイイド・ヤフヤー・アッスーシー Sayyid Yahyā al-Sūfī がアッスーリーに對して兵を起こし、彼を殺害したという知らせが届いた。サイイド・アッスーシーは、アミール・ムーレイ・ザイダーンに使者を送り、自らの館 (マラケシュの王宮) へ戻り、再び君主となるように伝えた。こうして、彼は復権した。

ジェンネの人びとは、トンブクトウの人びとを直ちに非難した。これは、トンブクトウの人びとが古い時代に彼らの首にかけて行つた「モロッコの君主への」バイアを、徒らに破棄したからである。そして、ジェンネの人びとはトンブクトウの人びとに、激しく対立した。ガオの人びと (軍) がジェンネの人びとに追隨した。そもそも、彼らはアミール・ムーレイ・ザイダーンへのバイアを維持しており、これを変えていなかったのであるが。

トンブクトウの人びとは、これを恐れた。そして、「一旦」破棄したバイアを再び行い、これを更新した。それでも、このことは前述のパシャ・アリーが「バイアを破棄する」という「重罪」を犯したこと」に変わりはなく、その結果、パシャの任期の末期に、アミールは、このことについて厳しい罰をパシャに科した。【二二二】加えて、このパシャの時代、役人たちは地上のあらゆる地方と場所において、不正をなし、暴虐に振る舞い、悪事を働いた。

また、この時代に、白い鳥がトンブクトウに飛来した。それは一〇二四年ラビーウ第一月二二日 (一六一五年四月一

日)に現れ、同年ジュマード第一月二八日水曜日(同年六月一五日)まで目撃されたが、子供達はそれを捕らえ、殺してしまった。

一〇二五年(一六一六年一月—一六一六年二月)、「ニジェル」川が例年以上に氾濫した。これまで誰もそれほどの氾濫を見たことがなく、また、高齢のシャイフは皆、これまでこれほど多くの水を見たことはなく、それを見たことがあるという者を見たこともないという点で意見が一致した。氾濫水は、農地に達し、作物に被害を与えた。そして、ジェンネ地方の西部の大部分が水没し、多くの人間や家畜が死んだ。この年のズー・アルカアダ月一日月曜の夜、すなわち「ユリウス暦の」一月二一日、川「の氾濫」は、マアドウグ Ma'adoug<sup>(21)</sup>まで達した。

一〇二六年初の聖なるムハッラム月(一六一六年二月三〇日—一六一七年一月二八日)、パシャ・アリーとカーイド(將軍)ハッド・ブン・ユースフ・アルアジュナーサー Hadd b. Yusuf al-Ajnasī との間に反目と対立が生じた。パシャは、城砦を後にして、マラケシュ人部隊から選抜された八三人ほどの者と共に、城砦の外に留まった。彼らの全ては、一致団結して彼に忠実であり、昼夜を問わず彼を警護していた。その後、パシャ・アリー<sup>(22)</sup>の権力は失墜し、前述の年の預言者のラビーウ(第一)月五日月曜日(一六一七年三月三日)、解任された。彼は、四年一〇カ月パシャの地位にあった。

パシャ・アリーが解任された日、全軍一致により、パシャ・アフマド・ブン・ユースフ・アルウルジー Ahmad b. Yusuf al-Ulji<sup>(23)</sup>が、その地位に就いた。前パシャ・アリー・ブン・アブド・アッラーフが投獄され鉄鎖をかけられた後に、軍はアミール・ムーレイ・ザイダーンに書簡を送って彼について報告し、彼の不法行為と醜行、そして彼が財務官<sup>(24)</sup>なしに取得したスルタンの財産について説明した。アミールは彼のことに<sup>(25)</sup>ついて翌年処分を下した。このことについては、至高なる神が<sup>(26)</sup>お望みになれば、後に述べるであろう。

「その後」災難は増える一方で、次の時には、それ以前よりも深刻さを増大するばかりであった。そしてこの年は雨が降らなかつた。人びとは雨乞いの為に出かけ、<sup>(27)</sup>それを約一四日間続けたが、空は晴れわたるばかりであつ

た。その後、僅かに雨が降った。

こうして、この年、異常な価格の高騰がトンブクトウの地に起きた。多くの被造物が飢え死にし、人びとは家畜や人間の死体を食べた。両替は貝殻五〇〇個まで下落した。その後、疫病が発生し、飢えを免れた人びとの多くがこの疫病で死んだ。価格の高騰は二年間続き、人びとは財産を手離し、家財道具を売り払った。シャイフたちは、自分たちはこのような事態を見たことはなく、同様のことを彼ら以前のシャイフたちから聞いたこともないという点で意見が一致した。

前述の年末のズー・アルヒッジャ月末の木曜日、ニジェル川「の氾濫」はマアドウグまで達した。これは、「ユリウス暦の」一二月一八日のことであった。

一〇二七年サファル月二二日の日曜日午後の礼拝後（一六一八年二月八日）、トンブクトウの人びとは、東の空に遠くで鳴る雷のような音を聞いた。その音が非常に荒々しいために、地震だと感じた者もいた。こうして恐怖と怯えが市場の人びとに生じ、彼らは逃げ、散り散りになった。

私が信用を置いている同輩のひとり、次のように語った。彼は、この時、街の外一日行程のところにある木の下に座っていた。大地が揺れ動き、木々は倒れ、虫が巣穴から這い出てきた。その後、地震は収まり、木々は元の状態に戻り、虫も巣穴に戻ったと。

この年の預言者のラビーク（第一）月末の火曜日（一六一八年三月一七日）、アミールムレーイ・ザイダーンのもとから若きバシャアンマール<sup>(24)</sup> 'Ammārと、カーイドマミー・アットゥルキー<sup>(25)</sup> Mañī al-Turkīが、遠征軍を率いてやってきた。その遠征軍には、約四〇〇人の銃兵と、【二三三】財務官でカーイドのムハンマド・ブン・アビー・バクル<sup>(26)</sup> Muḥammad b. Abī Bakrがいた。彼らはその日の午前、アブラーズ（またはアブラーザ）に野営した。すると、その夜、パシャアファド・ブン・ユースフは、彼らに挨拶をしにやって来た。そして、同地（トンブクトウ）の法学者で高名な人びとも、同様にやって来た。こうしてラビーク第二月水曜日の新月の夜となった。

パシャ・アンマールは、その翌日、「トンブクトウの」町へ入った。他方で、カーイド・マミーと銃兵は、土曜日の午前になってから町に入り、スルターン（ザイダーン）の書簡を読み上げ、前パシャ・アリー・ブン・アブド・アッラーフについて命令されたことを実行した。カーイド・マミーは、前パシャ・アリーに「彼が着服した」スルターンの財産について尋問し、激しく拷問を行ったので、前パシャ・アリーはこの時死んだ。

カーイド・ハッドは、新パシャや軍がトンブクトウへ到着した三日後、軍勢と共にアサファイへ向けて遠征軍と共に出發した。既に、前述のカーイド・マミーと共に来た銃兵たちは、ニジェール川流域<sup>27</sup>に分散し、そのどの集団も、改宗者やアンダルス人の部隊と合流していた。そして、彼らはガオの町へマミーを追いやり、彼は死ぬまでそこにとどまった。

カーイド・ハッドがこの軍勢を率いて、「アサファイに向けてトンブクトウを」出發した理由は、アスキャ・アル・アミン・al-Amin<sup>(28)</sup>のもとからダンディ・ファアリー・Dendi Farī<sup>(29)</sup>がクビの町の方に向けて、襲撃を開始したという知らせが彼らに届いたためである。しかし、ホンボリ・コイ Hombori Koi<sup>(30)</sup>は、ダンディ・ファアリーに使者を送り、アスキャが、重篤な病に罹ったため、軍を率いて戻るよう命じた。こうして、ダンディ・ファアリーは「ダンディへ」戻ったが、カーイド・ハッドは、ニジェール川が氾濫するまで、警戒してそこに留まった。

ジュマダー第二月（一六一八年五月一六日―六月一三日）、パシャ・アンマールは、財務官でカーイドのアーミル・ブン・アルハサン、Amir b. al-Hasanと共に、彼の後就任者たち全てに及んだ審問や試練を受けることなく、強く高貴な様子でマラケシュに戻った。他方、カーイド・ムハンマド・ブン・アビー・バクルは、財務官としてトンブクトウに留まった。

ラジャブ月（一六一八年六月一四日―七月一三日）、軍は、パシャ・アフマド・ブン・ユースフを罷免した。彼は一年と四ヶ月の間、その地位にあった。この月、ハッド・ブン・ユースフ・アル・アジュナーシーが、これらの軍の合意によ

りパシヤに就任した。

同月、前述のアスキヤ<sup>II</sup>アルアミンが没した。彼の地位に、アスキヤ<sup>II</sup>ダーウード・ブン・アスキヤ・ムハンマド・バーン・ブン・アルアミール・アスキヤ・ダーウード Dawūd b. Askiya Muhammad Bān b. al-Amīr Askiya Dawūd が、ダンディで就いた。こうして、同月、パシヤ<sup>II</sup>ハッドは、かの地からトンブクトウに遠征軍を率いて戻った。彼は、祝福された幸運な統治者であり、彼の任期は輝かしい最良の時期であった。【二二四】同年、彼は、カナイの十分の一税 <sup>ushūr</sup> al-Kanai の支払いを免除した。というのも、かの価格の高騰による損害がまだ残っていたからである。これは、ムスリムにとって大いなる喜びであった。

この年のシャツワール月初め（一六一八年九月一日）、彗星が現れた。それは、最初、夜明けに現れて上昇を続け、日没の礼拝から夜半の礼拝の間に天頂に達し、消えた。

一〇二八年聖なるムハッラム月二一日火曜夜、ニジェール川「の氾濫」はマアドウグまで達した。これは、「ユリウス暦の」一二月二九日のことだった。同月末、パシヤ<sup>II</sup>ハッドが没し、ムハンマド・ナッディ Muhammad Naddi のモスクに埋葬された。彼は、七カ月の間その地位にあった。

この日付で、軍の合意のもとムハンマド・ブン・アフマド・アルマツスィー Muhammad b. Ahmad al-Māsi' が、パシヤに就任した。パシヤ<sup>II</sup>ムハンマドは、アスキヤ<sup>II</sup>バクル・クンプ・ブン・ヤアクープ・ブン・アルアミール・アスキヤ・アルハーツジュ・ムハンマド Bakr Kunbū b. Ya'qūb b. al-Amīr Askiya al-Hājī Muhammad を罷免したが、このバクルは、「罷免されるまで」一二年間その地位にあった。その後、アスキヤ<sup>II</sup>アルハーツジュ・イブン・アビー・バクル・クイシヤア・ブン・アルフック・ダンク・ブン・ウマル・クムザীগ al-Hājī Ibn Abī Bakr Kuysha'a b. al-Fukk Dank b. 'Umar Kunzāgh が即位した。パシヤ<sup>II</sup>ムハンマドは、「前のパシヤ<sup>II</sup>」アフマド・ブン・ユースフを捕らえて投獄し、死ぬまで牢獄に留めた。そして、トンブクトウでこの逮捕と投獄を行った後、ジェンネのカイドに、ユースフ・ブン・ウマル・

アルカスリー Yūsuf b. 'Umar al-Qasrī を任命した。

彼は、マラケシュ部隊「の長」に、甥のムバーラクを任じた。ムバーラクは権力を得ると、彼のオジ（すなわちパシヤムハンマド）の殺害を望んだ。パシヤムハンマドは、これに気付くと、ムバーラクのもとへ自ら急ぎ向かった。そして、彼に猛毒を飲ませた。ムバーラクはその時死んだ。

その後、パシヤムハンマドは、フェス部隊のカイドに、当時、バシユースであったハンム・ブン・アリー・アッダルーイー Hamm b. 'Alī al-Darī を指名した。その後、至高なる神は、このハンムを通じて、パシヤムハンマドを卑しめ死亡を決められた。そして、前述のカイドハンム・ブン・アリーは、パシヤムハンマドとそのワズイルで副官<sup>33</sup>であるムハンマド・カンバクリ・アルマッツイー Muḥammad Kanbakī al-Māssī を捕らえ、投獄し、二人は悪しき方法で殺された。

パシヤムハンマドは二年一カ月その地位にあり、三ヶ月間幽閉された。この彼の在任期間は、アスカヤールハーツジュ「の在任期間」と同じであった。

こうして、カイドハンム・ブン・アリー・アッダルーイーは、パシヤムハンマドの逮捕の日、位に就いた。【二二五】それは、一〇三〇年末の聖なるズー・アルヒツジャ月一九日水曜日（一六二二年一月二十五日）のことであった。彼は、パシヤ位に就かず（すなわちパシヤの称号を用いず）、また、高等の館 al-Dār al-'Alīya（パシヤの政庁）にも住まわず、城砦の中に別の館を建て、そこに住んだ。

一〇三一年サファル月下旬（一六二二年二月二十六日）、カイドハンムはジェンネの町のカイドであるユースフ・ブン・ウマル・アルカスリーに使者を送り、トンブクトウに召喚した。これは以前両者の間で起きたことについて、カイドユースフに報復するためであった。ユースフは、その呼びかけに応じて、預言者のラビーウ「第一」月五日月曜日の朝（一六二二年一月八日）、ジェンネを発ち、一〇日木曜日に（同一三日）トンブクトウに着いた。しかし、カー

イドハハナムは、ユースフが彼の好意を得るためにいくら支払うか、両者の間の使者に対して表明するまで、ユースフとの面会に同意しなかった。しかし、ユースフはこれに応じなかった。

そして、能力と意志と力と権能の持ち主であるお方（神）の権能によって、同月一六日金曜日夜（同一九日）前述のカーイドハハナムは、モスクで殺された。彼はその時イマームの後ろで夜半の礼拝をおこなっていた。そしてイマームの後ろで二度目の平伏礼で跪拝しているところを、ある者に銃で撃たれた。その者はパシャムハンマド・アルマーツスイーの支持者であるマーツサ出身の人々の一人で、銃を持っていた。彼らは大きな集団で、マーツスイーと彼らの使者を通して、この夜カーイドハハナムを殺害すると密かに彼に約束を交わしていた。殺人者は逃げて命拾いしていたが、「代わりに」事件に居合わせた者が捕らえられ、モスクの門の外で殺された。

軍の高官たちは、パシャムハンマド・アルマーツスイーと副官ムハンマド・カンバクリの殺害に合意した。二人はその時殺害され、その頭部は翌日市場に吊された。また、軍の高官たちは、前述のカーイドハハナムについて合意し、その時彼をカーイドハハナムの地位に就けた。「こうして、亡くなった」三人は、その夜、来世で再会した。

前のカーイドハハナム・ブン・アリーは位に就くと、アスキヤハールハルツジュを解任し、テンディルマのムハンマド・バンカン・ブン・バラマウ・アツサデイーク・ブン・アルアミール・アスキヤ・ダーウード *Muhammad Bankan b. Balana' Muhammad al-Sadiq b. al-Amir Askiya Dawud* を召喚し、彼をアスキヤに任じた。【二二六】ムハンマドはハナムの就任後直ちにやってきた。カーイドハハナムは、その地位に三ヶ月間あった。

一〇三一年預言者のラビウ（第二）月一六日金曜日、カーイドハハナム・ユースフ・ブン・ウマル・アルカスリーが、全軍一致により、最高位に就いた。彼は、前のカーイドハハナムの建てた館で、カーイドの称号や住居について前のカーイドハハナムのやり方に倣った<sup>34</sup>。ユースフは、祝福された総督であり、彼の任期は最良で繁栄を享受し、幸福や豊かさ、安楽や豊作があった。

就任したとき<sup>35</sup>、彼は、マッルーク・ブン・ザルクーン Malik b. Zayqun をカーイドとしてジェンネへ派遣した。マッルークは丸一年間その地位にあった。その後、カーイド・ユースフはマッルークを解任した。その後、カーイド・イブラーヒーム・ブン・アブド・アルカリーム・アルジャラーリー Ibrahim b. 'Abd al-Karīm al-Jarā'ī をジェンネに派遣し、イブラーヒームは、丸二年間その地位にあった。そして、彼によってその地の雑税 maks を与えられ、そこで多くの財をなした。そして、このことで彼に義務付けられている諸税の支払いを見事に行った。その後、ユースフは、ハーキム（政務官）として、アリー・ブン・ウバイド 'Alī b. 'Ubayd をジェンネに任じた。

一〇三二年ラマダーン月二三日土曜日（一六二三年七月一日）、カーイド・アブド・アッラーフ・ブン・アブド・アッラフマーン・アルヒンディー 'Abd Allāh b. 'Abd al-Rahmān al-Hindī はトンブクトウの町へ入った。当時、彼はパンバ<sup>36</sup>のカーイドであった。彼は、パシヤの地位に就任することを求めて、彼の部下たちと共に、夜明けにトンブクトウの町へ入った。彼を呼び、このような行動をとるよう扇動したのは、タガーザの徴税におけるスルターンの財務官でシャイフの、アリー・アッダラーウイー 'Alī al-Darāwī であった。しかし、カーイド・ムハンマド・ブン・アビー・バクル・アルアミーンと軍の高官達は、アブド・アッラーフの要求に応じず、彼を町から無理矢理追放した。

このため、彼とシャイフのアリー・アッダラーウイーは、改宗者からなる彼の部隊や、彼の部隊に属していなかったが彼らに従った者たちとともに町を出た。彼らは、カバラの港に留まり、ジェンネの町にいた彼らの同輩たちに「やって来るよう」使者を送った。すると彼らがやって来て、戦うことに同意した。

支配者でカーイドのユースフは、和平を結ぶため、彼らのもとに法学者たちとシャリーフたちを派遣した。しかし、カーイド・アブド・アッラーフらは拒否した。そこでカーイド・ユースフと財務官でカーイドのムハンマド・ブン・アビー・バクルは、彼らとともにいた軍に、アブド・アッラーフらとの戦いの準備をした。そして、前述の年のシャツワール月二五日水曜日（一六二三年八月二日）に、両軍は相見えた。そして会戦し、両軍で神がその往生を定めた者が「そ

こで「死んだ。

【二二七】アブド・アッラーフは望み敗れ、バンバへ戻った。シャイフ・アリー・アッドウラーウィーが、彼に従った。その後、当時のガオの軍のカーイド・ムハンマド・アルカルーウィー・アルマーツスィー・al-Qa'id Muhammad al-Kalawī al-Massīが、至高なる神の友、シャイフであるアルムニール al-Munirのもとへやって来た。そして、自らと共にトンブクトウにいるカーイド・ユースフのもとへ行き、彼とカーイド・アブド・アッラーフの間を調停するよう求めた。

こうして、ムハンマドとアルムニールは「トンブクトウに」来て、両者の和約を結んだ。カーイド・アブド・アッラーフは、その和平に臨席した。こうして、両者は和平を結び、カーイド・アブド・アッラーフは自らの町バンバへ戻った。その後、アブド・アッラーフはシャイフ・アリーが没したことを知った。このことについては、彼は自ら服毒して死んだとも言われている。神の守護がありますように。

カーイド・アブド・アッラーフは、パシャ・アリー・ブン・アブド・アルカーディル 'Alī b. 'Abd al-Qādir がトゥワートに出発するまで、バンバに住んだ。その後、パシャの代理で弟の、カーイド・ムハンマド・アルアラフ Muhammad al-'Arab がその地位に就いた。アブド・アッラーフは、裏切りにあつてトンブクトウへ連行された。彼は、預言者生誕の日の夜、打ち首にされ、市場に吊された。また、このことについては、パシャ・アリーが、彼の殺害を命じたとも言われている。

一〇三六年シャアバーン月二〇日（二六二七年四月二六日）、カーイド・ユースフは、その地位から解任された。彼は五年五ヶ月、その地位にあつた。そして、カーイド・イブラーヒーム・ブン・アブド・アルカリーム・アルジャラーリーが、軍全ての合意によつて、その地位に就いた。カーイド・イブラーヒームは、カーイドの政庁に住んだ。彼が就任したこの月、カーイド・イブラーヒームは、ジェンネのハーキム職から、ハーキム・アリー・ブン・ウバイドを解任し、サイ

イド・マンスール・ブン・アルバーシャー・マフムード・ルンク Sayyid Mansūr b. al-Bāshā Mahmūd Lunk をハーキムとして任命した。

一〇三七年ジュマード第一月（一六二七年二月二九日—一六二八年一月二七日）、「サアド朝」スルターン・ムレイ・アブド・アルマリック・ブン・ムーレイ・ザイダーン Mawlay 'Abd al-Malik b. Mawlay Zaydan<sup>37</sup>の使者が、彼の即位と彼の父の死の知らせを持ってやって来た。そして、ジュマード第二月四日木曜日（二月三一日）、使者によってもたらされた彼の勅令の写しが、ジェンネの町に到着した。

同月一日木曜日（二月七日）、カーイド・イブラーヒーム・アッジャラーリーは、トンブクトゥでパシヤに就任した。そして、彼はパシヤの館に入った。しかし、彼は軽んじられ、そのパシヤとしての力は弱く、下級の銃兵たちが臣民に対して内外で専横しても、禁止する者も非難する者もいなかった。彼らは強奪し、暴れ、悪を国に蔓延らせた。

この年のシャアバーン月一三日火曜日の夜（一六二八年四月八日）、ジェンネにおいてハーキム・サイイド・マンスール・ブン・マフムードが没した。【二二八】同月末、パシヤ・イブラーヒーム・アルジャラーリーが解任された。彼は、一年間その地位にあった。これは、彼（マンスール）がハーキム職にあった一年「と同じ期間」である。

彼を解任させるための企みは、ガオにおいてなされていた。これは副官アリー・ブン・アブド・アルカーディルが、彼ら（ガオの人びと）と（パシヤ・イブラーヒーム・）アルジャラーリーの間の和解を締結するために、同地に滞在していた時のことだった。「不和の理由については、」パシヤ・イブラーヒームは、彼がジェンネで得た財産をトンブクトゥにいた軍に与えた一方、ガオの人びとには何も与えなかったからである。ガオの人びとはこれに怒った。こうして、アリー・ブン・アブド・アルカーディルが彼らの調停をするため、ガオの人びとのもとへ行くと、彼らは副官アリーとパシヤ位「への就任」について盟約を交わした。

その後、副官アリーは、トンブクトゥへ戻り、同地の人びとを「自身のパシヤ位就任のため」唆した。すると、彼らは

これを受け入れ、この年のラマダーン月四日（一六二八年四月二八日）、彼をパシヤに任じた。彼は、前パシヤ・イーブラーヒム・アルジャラーリーの在任中、強奪者や横暴な者に対して抜かれた神の剣であった。彼は、彼らを弱体化させ、服従させ、彼らを殺した。彼らは恐れ、モスクや聖者の館へ逃げ込んだ。彼らは窮地に追い込まれた。

パシヤ・アリーは四年五ヶ月の間、その地位にあった。彼の在任中、前のパシヤ・アンマール・ブン・アブド・アルマールイク・‘Amīr b. ‘Abd al-Malik が、マラケシユで没した。神がその恩恵をもって、彼に恵みを垂れますように。彼が没した時、前述のアリー・ブン・ウバイドも、ラマダーン月（一六二八年四月二五日―五月二四日）に、ジェンネのハーキムに就いた。彼は、七ヶ月間しかその地位にいなかった。というのも、一〇三八年預言者のラビーウ（第一）月（一六二八年一〇月一九日―十一月一七日）、パシヤ・アリーが、彼らに生じた反目のためにアリー・ブン・ウバイドを解任したためである。パシヤ・アリーは、すでに解任されたカーイド・ユースフ・ブン・ウマルに、ジェンネのハーキムに就くよう命じた。しかし、彼はそれを受け入れず、マッルーク・ブン・ザルクーンを指名した。このため、パシヤ・アリーは、ジェンネのカーイドにマッルークを任命した。

その後、パシヤ・アリーは、前のパシヤ・イーブラーヒム・アルジャラーリーを、サンコーレの部族に対する役人として指名した。このため、イーブラーヒム・アルジャラーリーは、彼らの元へ向かった。そして、彼らの生産物（商品）のザンカルを徴収した。イーブラーヒムは、これによって、彼を弱体化させ、軽んじる事を意図していた。その後、イーブラーヒムが戻ると、マッルーク・ブン・ザルクーンはカーイド職から解任され、パシヤ・アリーはそこにイーブラーヒムを就けた。まもなく、イーブラーヒムは怒りのために死んだ。

このことについては、以下のことが言われている。イーブラーヒムは、自分が、聖者、法学者であるマフムード・フディール・サーヌー Mahmūd Fūdī Sānū の墓で死ぬことを願った、その願いがそこで聞き届けられたのだと。神が彼（マフムード）に恵みを垂れ、神が彼によって私たちをお助けくださいますように。この「彼の死の」理由は、パシヤ・アリー

が金で飾られた剣を、前パシャ・イブラーヒームに送りつけて言った。「現世を愛するお前以外、この剣「の所有者」に値する者はいない」と。このため、イブラーヒームは涙を流し、自らの死を願ったのである。彼は、これはパシャ・イブラーヒームの嗤笑と愚弄以外の何ものでもないと言った。

その後、前述のマツルック・ブン・ザルクーンがカーイドに復帰し、その後、解任されて殺された。

【二一九】一〇三八年ジュマター第一月七日土曜日（一六二八年二月二三日）、財務官でカーイドのムハンマド・ブン・アビー・バクルが、市場で囚われの身になって殺された。彼は二日間幽閉された後、スルターン・ムーレイ・アブド・アルマリークの命によって、三日目に殺され、市場に吊された。彼の位には、財務官でカーイドのユースフ・ブン・ウマル・アルカスリーが、スルターンの命により就任した。

というのも、スルターンに対するカーイド・ムハンマドの詐欺と裏切りが明らかになったため、彼は冷酷な方法で殺されるべしとスルターンが書き送ったからである。カーイド・ムハンマドは、在任中に任された財産をカーイド・ユースフと互いに精算をおこなった時、「おそらく、自身の不正がばれて」彼の殺害を決意していた。そして、彼の殺害を望んで、幽閉中にひどい拷問を行った。カーイド・ユースフのマラクেশユ人部隊がこのことに気づいて、両者の間に入り、スルターンに報告した。

すると彼らにスルターンの返書が届き、スルターンは、冷酷な方法によるムハンマドの殺害と、カーイド・ユースフがムハンマドの地位に就くよう命じたのである。カーイド・ユースフは、その時市場で枷をされたムハンマドの殺害に立ち会った。ユースフは、自らの馬に乗っていた。ムハンマドが恐れ戦いているのは明らかであった。そこで、カーイドであるユースフは、ムハンマドに言った。「おお、ムハンマド殿よ。神のことを思いなさい。今やおまえの精神は神とともにある。お前は耐えるしかない。」首をはねられる時、ムハンマドは「母よ！」と叫び、没した。その後、吊され、しばらくして降ろされた。そして、整えられ、葬儀の祈りが行われ、大モスクの墓地に埋葬された。

前述のシャバーン月末（一六二九年四月四日—三日）、パシャ・アリーはマースイナ<sup>④</sup>へ侵攻した。この経緯は以下の通りである。彼がパシャに就任したとき、その直後にフンドウク（長）スラムウ（またはスラムク）Sultan / Sulank が没した。そして、彼の甥ハンマド・アーミナ Hammad Aminah が、この年のラマダーン月に就任した。パシャ・アリーは、ハンマド・アーミナをトンブクトウで指名するために同地に来るように言い送った。しかし、彼は拒否し、行かなかった。このため、パシャ・アリーは、彼を襲撃し、突然、彼らの所へやって来たのである。

フンドウク・ハンマド・アーミナは、彼の仲間達の全てと共に逃げた。しかし、パシャ・アリーは、彼らを追うことが出来なかった。なぜなら、当時は夏であり、彼は強力で堅固な軍を率いて来なかったからである。こうして、彼はジェンネの町へ向かい、前述の月の二五日土曜日の朝（一六二九年四月九日）に到着した。【二三〇】こうして、ラマダーン月水曜日の新月の夜となった。翌二日木曜日午前、パシャ・アリーは再びマースイナの彼らのもとへ向かった。しかし、彼は、彼らに勝利せず、同月、攻撃することもなくトンブクトウへ戻った。その後、二人は和平を結んだ。

一〇三九年初の聖なるムハッラム月末の月曜日（一六二九年九月九日）、ウマル・ブン・イブラーヒーム・アルアル・スィー 'Umar b. Ibrahim al-'Ausi' が、トンブクトウへ進軍して来た。パシャ・アリー・ブン・アブド・アルカーディルも出陣し、両軍は、アルファンダリヤの少し後方のアルアフラースで相見え、会戦した。前述のウマルは、彼の奴隷ピラール Bilal と共に殺され、彼の部下達は敗れ、背を向けて逃げた。ウマルはラクダに載せられて運ばれ、その日に市場に吊された。彼の手はガオに送られ、奴隷の頭部はジェンネへ送られた。

それから、ウマルの父、イブラーヒーム・アルアル・スィー Ibrahim al-'Ausi' は、残りの子と軍と共に、町の背後の西方にある丘へ戻り、そこへ宿営した。彼は、そこで黒いテントを張り、<sup>④</sup>何日間もそこで略奪した。その後、彼らは発ち、失望し、不満を持ってワラータへ戻った。

その後、彼（パシャ・アリー）は、ジェンネのカーイドであるマッルークに、この和約に基づき、マースイナの長

sāhib ハンマーディ・アーミナのザンカル「徴収の」要求を受け入れるように言い送った。

### 第三章

同年の聖なるズー・アルカアダ月半ば（一六二九年六月一六日頃）、私（著者サアディー）は、サイイドにして兄、「神を」愛する者、公正な者、法学者であるムハンマド・サンバ Muhammad Sanba、マースィナのカーディーを訪問するために、旅に出た。彼は何年も前から、私の訪問を求めていたが、栄光なる神は、この時まで、それを運命づけられなかった。そしてそれは、その地域への私の初めての訪問であった。

【三二一】私は、前述のサイイドの宿営地に着くと、彼がスルターン<sup>43</sup>ハンマド・アーミナの野営に行っており、留守であることを知った。そこで、私の到着の知らせが、彼の所へ送られた。すると彼は、私に使者を寄越し、以下のことを私に選ばせた。私がスルターンに面会と挨拶をするために、サイイド、ムハンマドの元へ向かうか、彼が私の所へ着くまで私は彼の陣営に留まり、その後、挨拶と訪問のために共にスルターンハンマドのところへ戻るかと。

私は前者を選んだ。というのも、二回戻るといふ労苦を、彼にさせないようにするためである。私は、丁重で名誉ある待遇を受けて彼らの所へ行った。私たちは、次の日には到着した。私たちが、スルターンハンマドの野営の近くまで行くと、サイイドでカーディーのムハンマドは、そのことをスルターンに知らせた。するとスルターンは、私の元に、会見のために使者を遣わした。

私たちは、彼の宿営地に着き、午前中に、私たちの宿泊所に入った。それと時を同じくして、雨が降った<sup>44</sup>。私たちのうち誰一人として、正午の礼拝の後まで「他の」誰かを見た者はなかった。私は、その時、サイイドでカーディーのムハンマドを訪ねて宿泊所に行った。彼は私を歓待し、私のことをこの上なく喜び歓喜した。彼は私の健康を祈願した。

その後、彼は私を連れて、スルターンを訪ねて館へ行った。そして、スルターンも同様に私を歓待してくれた。私「の到着」は、ザンカルの役人がスルターンハンマドのもとに到着したのと同時だった。彼の高官達の全てが臨席し、「ジエ

ンネの「カーイド＝マツルークの書簡がそこで読み上げられた。「その内容は、」パシヤ＝アリーがスルターン＝ハンマドに許しを与えたこと、そしてスルターン＝ハンマドがザンカルの役人からザンカルを受け取るようにということについてだ。

彼らはこれをたいそう喜んだ。そして、最初に話し始める役職であるコンボマウ＝ダーウード *Konbona Dawud* が語った後、スルターン＝ハンマドが会見の場において話した。曰く、「今や、余に王位 *al-salana* が確立した。というのも、パシヤは、ザンカルの要求（徴税権）を我々に認めたからである」。それから、スルターン＝ハンマドは、ザンカルが分配された高官達に言った。「神よ、神よ。ザンカルの徴収については、遅滞なく努めるように。またその徴収は素晴らしく、よく選ばれたものであるように。私はパシヤ＝アリーを恐れているのである」。彼は、それを三回言った。するとコンボマウは言った。曰く、「今や、我らは貴方様を恐れております。貴方様は、パシヤ＝アリーを恐れていると述べられました」と。それから、彼らは、「クルアーンの」開扉章を朗読し、散会した。

私たちは、その夜はそこで過ごした。翌日、彼らは職務を終えた。この職務こそ、サイイドにしてカーディーのムハンマドが彼らのもとにやって来た理由であった。そして、カーディー＝ムハンマドは、自らの宿营地への帰郷を決めた。そして、彼は、私が彼と共に戻ることをスルターン＝ハンマドに言い送った。するとスルターンは次のように言った。彼はまだ私（著者サアディー）のことをよく知らない。このため、カーディー＝ムハンマドについては、至高なる神の祝福において、立ち去らせよ。私（サアディー）は、スルターン＝ハンマドが望めばそれに従うのであると。しかし、カーディー＝ムハンマドはこれを承諾せず、彼は、私と共に立ち去ることを決めた。

【三三三】その日の夜、スルターンは、カーディー＝ムハンマドの宿泊所に彼を訪ねて来た。私も、彼と共に臨席した。サイイドにしてカーディーのムハンマドは、スルターン＝ハンマドに言った。「この彼（すなわち著者）の訪問は、完全なる神が、あなた様の治世になって初めて、割り当て給うたのです。神はそれを貴方への恩賞として実現させたので

す。なぜなら、私は、あなた様の叔父のイブラーヒム様の即位以来、神に何度もそれを求めてきたからです。しかし、至高なる神は、この時になるまで、それをお定めになりませんでした。私は、至高なる神がお望みになれば、必ずや明日、彼と一緒に私の館へ帰ることにいたします。ですから、あなた様が彼と親交を深めることができるよう、私は、今夜、一人でおりました」と。

スルターンは、その通りにした。そして、スルターンは、一〇頭の牛と、贈り物を私に与えた。彼らにとって贈答は一般的ではない。なぜなら、彼らの考えでは、この世の財産は、大切なものであったからである。その後、私たちは、サイイド、ムハンマドの館へ戻った。彼は、我々の歓待やその他全てのことを何日もよくしてくれた。

その後、私は、ジェンネの館へ帰る決心をした。すると、彼は私に二〇頭の牛と、犠牲の獣として一〇頭の羊を与えてくれた。私が彼の宿营地から発つ日、彼は、馬に乗って同行してくれた。大分来て、私たちが互いに別れの挨拶をした時に彼は言った。「あなたの訪問は、私にとって、何ものよりも大切なものです。もし至高なる神が次の時まで我々を生き長らえさせて下さったならば、我々を再会させて下さるでしょう」と。私も同様に、彼にその言葉を繰り返した。「その後も」彼との私の関係は、男らしさと親交とともにあった。それは、彼が息を引き取り、彼が楽園に至るときまで続いた。至高なる神が彼に恵みを垂れ、彼を赦し、寛恕し給いますように。神が、その恩恵と高貴さを以て、その高御座の陰で、また至高の極楽において、彼と私達を再会させますように。

### 第三章

このムハッラム月、すなわち一〇三九年初頭（一六二九年八月一日）、バシヤリアーは、「トンプクトウの」アルフナー・モスクの建設を始め、サファル月に終えた。その後、バシヤリアーはダンディへ向かう遠征軍を用意し、自らそれを率いて、同地へ進軍した。

【二三三】彼は、クーキヤーの町へ着くと、そこに遠征軍を野営した。そして、アスキヤード・ブーン・アスキ

ヤ・ムハンマド・バーン・ブン・アルアミール・アスキヤ・ダーウッドへ、和平について使者を送るとともに、アスキヤ  
IIダーウッドの娘との結婚を求めた。そして、使者と共に、多くの贈り物を送った。するとアスキヤIIダーウッドはこの  
和平を受け入れ、彼の親族の娘の一人を妻合わせた。そして、パシヤIIアリーの使者が帰還する時、自身の使者を寄越し  
た。使者は、パシヤIIアリーへ、その和平と結婚の承諾に関する書簡を届けた。こうして、彼がパシヤ位にある間、両者  
の間には善行と愛情、安全の道が開けた。

それから、パシヤIIアリーは、トンブクトゥへ戻り、彼の妻に会うため、舟を遣わした。すると、彼が望んだように、  
妻となる女性がトンブクトゥへやって来た。その後、パシヤIIアリーは、宣言したように、「メツカ」巡礼の旅を決意し  
た。彼は、望む者と和平を結びはじめ、トンブクトゥ軍から彼と共に行く銃兵を指定した。そして、ガオの人びとへ、定  
められた数「の兵」を供出するよう言い送った。その人数は、彼がトンブクトゥの人びとに指定した者に加えて、五〇名  
の銃兵で、彼と共に行く者であった。するとガオの人びとは拒否し、「供出を」差し控えた。こうして、このことは、パ  
シヤIIアリーの中に彼らに対する怒りとして蓄積された。

他方で、カーディーのサイイド・アフマド Sayyid Ahmad と、同地の法学者は、パシヤIIアリーに「町を」不在にする  
ことを禁じ、忠告した。そして、サンコーレのモスクにおいて、彼をともなった集会で、彼にその旅に対する彼の決意を  
翻意させるであろうことを話した。彼は黙りこくり、「彼らの見解を」拒絶した。

一〇四一年サファル月一四日（一六三二年九月一日）、パシヤIIアリーは「トンブクトゥの」人びとや軍に別れを告  
げ、彼らに対し、兄弟でカーイドのムハンマド・アルアラブを代理人として任命した。そして、トゥワート<sup>46</sup>への道を辿つ  
た。そして、サイイドで祝福された者、敬虔な者、禁欲者、サイイド・アフマド・ブン・アブド・アルアズィズ・アル  
ジャラーリー Sayyid Ahmad b. Abd al-'Aziz al-Jarānī と、法学者、サイイド・ムハンマド・ブン・アルアッラーマ・アル  
ファキーフ・アフマド・バーバー Sayyid Muḥammad b. al-'Allāma al-Faqīh Ahmad Bābā<sup>47</sup> に同行した。こうして、アラワ

の町で、預言者のラビーウ（第二）月の新月の夜となった。

パシャ・アリーの一団がトゥワートに着くと、アルファイラー・ブン・イーサー・アッラフマーニー・アルバルブーシー al-Filāh b. 'Isā al-Rahmānī al-Barbūshī と彼の部下の者たちが、彼らを追った。アルファイラーは、パシャ・アリーを殺すつもりで、夜に彼らに向かつて出た。するとパシャ・アリーは、二人のサイドのもとへ逃げ、彼らのテントへ入り、保護を求めた。このため、アルファイラーは、彼を二人の保護下にとどめた。しかし、アルファイラーは、パシャ・アリーの部下達の一部を殺し、彼に巡礼を断念させ、【二三四】パシャ・アリーらをトンブクトウへ追い返した。そして、パシャ・アリーは彼の命を救ってくれたことに対し、多くの財産を彼ら巡礼者に与えた。そして、この集団は、二人のサイドと共に巡礼「の旅」を続けた。

パシャ・アリーは、この年のラジャブ月（一六三二年一月三日―二月一日）にトンブクトウに着くと、侍従ムハンマド・ブン・ムウミン・アッサービーイー Muhammad b. Mu'min al-Sābī'i を、彼の書簡と共にジエンネへ向かわせた。また、弟のカーイド・ムハンマド・アルアラブを、カーイドとなるようガオの人びとのもとへ向かわせた。そして、パシャ・アリーは、「先に巡礼を決意した時、」ガオの人びとが五〇人の銃兵「の供出」を拒否した時から溜め込んでいた怒りのために、彼らに報復することを望んだ。

弟のカーイド・ムハンマドが彼らガオの人びとのもとへ到着し、報復を開始すると、彼らは蜂起し、カーイド・ムハンマドを捕らえ、枷をかけた。そして、彼の財産を奪い、彼の殺害を決意した。しかし、カーイド・ムハンマドは、大シャイフたちのもとへ保護を求めたので、彼らは、殺害を思いとどまった。「カーイド・ムハンマドに関して」嗤笑する知らせがパシャ・アリーに届くと、彼らは、彼の弟のことについて取引をした。パシャ・アリーは、彼らとの戦いを望んで、自ら彼らのもとへ向かった。

しかし、彼は、トンブクトウの人びとに、それ（戦いを意図していること）を示さなかった。そして、この年の聖なる

ズー・アルカアタ月（一六三二年五月一〇日―六月八日）に、道中で耕作するかのように出かけた。そして、そのように進軍し、それを一部の軍が追った。そして、ジェンネの町にいた軍は、このことを聞くと、陸路でガオへ二人の使者を一人ずつ送った。というのも、彼ら（軍）は、パシャ・アアリーに対する反乱について、ガオの人びとと統一された意志と見解をもっていたからである。そして、ガオの人びとは、それを受け入れ、合意した。

パシャ・アアリーがガオに到着すると、人びとは急いで出陣し、あつという間に彼を破った。彼とその部下の者は逃げた。人びとは、パシャ・アリーの財産を運んでいる舟を奪った。その中には、彼の女奴隷がおり、彼は、彼女「が捕らえられたこと」をひどく悲しんだ。彼らはまた、アスキャムハンマド・バンカンも捕らえたが、彼のことは讃え、称讃した。そして、アスキャの恩恵を求めて、彼にそこに住むことを求めた。

アスキャムハンマドは、パシャの弟、前述のカーイドムハンマド・アルアラブのために執り成しをした。彼らは、執り成しに同意して、カーイドムハンマドをアスキャムハンマドの保護下に置いた。アスキャムハンマドは、パシャ・アアリーとガオの人びとの和平を結んだ。その後、彼らは、前述のパシャの女奴隷を返還した。しかし、パシャ・アアリーはトンプクトウへ到着すると、ガオの人びとを全滅させるため、遠征軍を整えた。彼は、ジェンネのカーイドムマツルークへ、同地にいる軍に俸給と贈り物を分配するよう、七〇〇ミスカールの金を送った。これによって、ジェンネ軍が氣をよくすることを期待した。

【二三五】それから、パシャ・アアリーは、「ジェンネに在る」侍従ムハンマド・ブン・ムウミン・アツサバリー Sabari（前頁ではアツサビーイー）のもとへ、第一の使者に続けて、第二の使者を送った。彼は、侍従のムハンマドに、以下のことを書き送った。侍従ムハンマドが、サルティー・ウリー・ムハンマド・カリー Salī Wūrī Muhammad Qalī を捕らえ、彼が館に所有しているもの全てを奪い、彼の家人や子どもを売りはらう。そして、サルティーに鉄鎖をして、パシャ・アアリーのもとへ送る。彼はサルティーの殺害を望んだ。それは、パシャ・アアリーが巡礼の旅を決意したとき、サル

テイーが彼から財産を奪ったためである。パシャリアリーは、長い間それを待ち、長い時が過ぎた。その結果、彼は「巡礼に」出発した。「財産を」得た者がそれを返すことなく。

第一の使者に先立って、第二の使者が犠牲祭二日目（ズー・アルヒツジャ月一日、一六三二年六月一九日）の月曜日朝に、ジェンネの町に到着した。侍従のムハンマドは、その当時カーイドのもとで諮問会議に臨席していたが、パシャリアリーの書簡を読むと、前述のサルテイーへ「やって来るように」言い送った。その時、サルテイーは、イーダの期間における彼らの習慣に従って、ジェンネ・コイ Jenne Koi の館の娯楽の場にいた。サルテイーはやって来ると、捕らえられ、鉄鎖にかけられ、城砦に投獄された。

侍従のムハンマドはその日、サルテイーの館にあるものを調べるため、もう一人の公証人と共に私を臨席させた。我々は目録に基づいて、マムルークを除いて、館にあるものを数え上げた。すると侍従のムハンマドは、マムルークを数え上げるために、明日、もう一度やって来るよう我々に命じた。翌日、私達が彼らを数え上げると、侍従ムハンマドは、私達に、自身と共に牢獄に行くように命じた。というのも、サルテイーにこれが所有している財産の全てであることを我々に言明させるためである。我々は火曜の昼間に牢獄へ入ると、彼が悲惨な状態にあることを見て取った。私が目録を読み上げると、彼はそれが彼の全ての財産であると言明した。そして、我々はそれについて、証言を行った。

その後、パシャリアリーの第一の使者が、一〇四一年末の聖なるズー・アルヒツジャ月一四日木曜昼（一六三二年六月二二日）に到着した。人びとが書簡を読み、「そこに」書かれた冒頭部を見ると、彼らは疑いも疑念もなく、弱さと無力さがパシャを捕らえていること、また、パシャは彼らが反乱を終えていると思っていることを確信した。

そして、彼らはこの時反乱を起こした。そして、彼らは、侍従ムハンマド・ワラド・ムウミン（すなわちムハンマド・ブン・ムウミン）を捕らえ、前述のサルテイー・ウリーがいる牢獄に、彼を投獄した。そして、サルテイーの両足にかけられていた鉄鎖を外し、それを侍従ムハンマド・ブン・ムウミンの両足にかけた。【二三六】その時、カーイドと軍の高

官たちのすべては、侍従のムハンマドの館にある財産を調べるため、もう一人の公証人と共に私を臨席させた。我々はマムルークと女奴隷を除き、目録で館を調べた。それから、彼らは、マムルークと女奴隷を数え上げるために、明日、もう一度やって来るよう我々に命じた。

翌日、前述の月一五日金曜日（一六三二年六月二三日）に我々が彼らを数え上げた後、カーイドと軍の高官たちは、牢獄にいる侍従のムハンマドのもとへ行き、彼の財産について尋ねるよう、我々に命じた。こうして、我々は、火曜日にサルテイー・ウリーに見た「悲惨な」状態を彼にも見てとった。王者たる神に讃えあれ。神は、望まれたことをその王国になさる全能な御方であり、神は、苦悩する者達を、瞬きするより早く、勇気づけられる御方である。

彼らは、牢獄に侍従ムハンマドをとどめていたが、その後、彼を殺害することで合意した。こうして、侍従ムハンマドは一〇四二年初頭の聖なるムハッラム月アーシューラーの夜（一六三二年七月一八日）に殺された。

今からガオの人びとと、パシヤ・アリー・ブン・アブド・アルカーデルの話を完結させよう。その後、ガオの人びとは、アスキヤ・ムハンマド・バンカンを解放し、彼はトンブクトゥへ戻った。彼は到着すると、パシヤ・アリーがガオへ「戦いのために」戻ることを決意し、熱心に尽力しているのを見て取った。パシヤ・アリーは、ガオの人びとに対し、さまざまな懲罰の道具を準備していた。

前述のムハッラム月二日日曜日（一六三二年七月一〇日）、彼は、彼の舟にカバラの港からの出航を命じた。しかし、軍は、ブーリの村に到着すると、月曜の夜に反乱を起こし、アリー・ブン・ムバーク・アルマーツスィー、*Alī b Mubarak al-Masī*をパシヤに任じた。そして、彼らは舟でカバラの港へ戻ってしまった。

パシヤ・アリーはその月曜の朝に出発し、陸路で軍を追った。しかし、この反乱と彼の解任の知らせは、彼の元にはとどかなかつた。彼は軍の方へ向かったが、道中、その知らせを聞き、トンブクトゥへ戻った。しかし、彼に従っていた者の全ては、カーイド・ムハンマド・ブン・マスウード・アルマツラークシー *Muhammad b. Mas'ūd al-Marrākushī*を除い

て、逃げてしまっていた。カーイドゥムハンマドは忠実で「パシャリアリーと」盟約を結んでいた者であった。

パシャリアリーは火曜の夜はトンブクトゥで過ごし、翌日、カーディーのサイイド・アフマドに、軍と自らの間で和約を結ぶために、港にいる彼らのもとへ行くように命じた。カーディーアフマドは彼らのところへ到着し、そのことを提案したが、「二三七」彼らが聞く耳を持たず反感ばかりを強めたのを見てとった。このため、彼は町へ戻り、「自らは」パシャリアリーの元には行かず、起きたことを伝える使者を遣わした。そして、自身は自らの館に帰った。

水曜の朝、軍は港からトンブクトゥへ戻った。このため、パシャリアリーは町から脱出した。近郊のアルファイラーリー・ブン・イーサー・アルバルブーシーの宿营地へ向かい、彼に「自らの」逃亡の助力を求めた。そして、木曜の夜は、彼の宿营地で、彼と共に過ごした。しかし、アルファイラーリーは、パシャリアリーの求めに応じず、木曜朝、パシャリアリーをトンブクトゥの町へ送り返した。そして、アルファイラーリーはパシャリーを連れ、執り成しを求めてカーディーの館へ向かった。

カーディーはこのことについて新パシャリアリー・ブン・ムバーラクに使者を送った。すると、新パシャリアリー・ブン・ムバーラクは、前パシャリアリー・ブン・アブド・アルカーデルのもとにあったパシャ位を示す全てのものを奪い取つて来る者を遣わした。前パシャリアリーは全てを差し出した。その夜、銃兵の集団が前パシャリアリーのもとにやって来た。新パシャリアリー・ブン・ムバーラクが命じ、銃兵たちは、前パシャリアリーを捕らえ、枷をして城砦まで連行した。そして、厩舎で前パシャリアリーは打ち首にされた。彼と共に「唯一、彼のもとに残った」カーイドゥムハンマド・ブン・ユースフ・マスウードも同様であった。

彼らは、前パシャリアリーの足をもつて、市場まで遺体を引き回した。その後、それを市場に吊し、しばらくして降ろした。彼らは遺体を整え、大モスクの墓地の、至高なる神の友、スィーディー・アブー・アルカースイム・アットウウーティー Sayyid Abū al-Qāsim al-Tuwāfir—至高なる神が彼に恵みを垂れますように—の隣に彼を埋葬した。それは前述のム

ハッラム月六日木曜日（一六三二年七月一日）のことであった。

註

(1) 以下、解題に関する多くの部分は、英訳書であるジョン・ハンウィック John O. Hunwick, *Timbuktu and the Songhay Empire*, Leiden: Brill, 1999 の序論 (pp. xv-lxv) に拠る。このため、同書から引用した場合は括弧 ( ) で該当ページを文中に示し、それ以外を参照している場合のみ、典拠を示すこととする。

(2) 西アフリカ内陸、現在のマリ共和国中部に一四一六世紀を最盛期として栄えた交易都市。サハラ砂漠の南縁と、ニジェール川が最も北に張り出した部分の接点に位置し、北からのラクダの輸送の終点、南から舟で運ばれてくる商品の集結地として、交易上重要な位置を占めた。川田順造「トンブクトゥ」日本イスラム協会他監修『新イスラム事典』平凡社、二〇〇二年、三七三―三七四頁。地名については、本稿末の地図も併せて参照されたい。

(3) ニスバは職業や出身地、帰属する部族名などにちなんで付けられる名前のこと。サアド族については、モロッコのサアド朝君主も同族出身を称している。ただし、サアディーについては、サアド朝君主とは異なり、預言者ムハンマドの血統に連なる人びとであるシャリーフ (sharif) 原

義は「高貴な(もの)」と自称しなかったようである (p. lxiii)。

(4) 西アフリカの内陸、現在のマリ共和国にあるニジェール川中流域の交易都市。ニジェール川内陸デルタの物資の集散地として、また、サハラ砂漠の南縁に位置するために食料自給が不可能なトンブクトゥの食料その他の供給基地として栄えた。竹沢尚一郎「ジェンネ」大塚和夫他編『岩波イスラム辞典』岩波書店、二〇〇二年、四三二―四三三頁。

(5) アルマアンマとは、アラビア語の銃兵 al-*munā* から転じた語で、一五九一年のソンガイ帝国崩壊以降、トンブクトゥの支配者層となった者たちのこと。元はサアド朝軍に属していた者によって構成された (p. 365)。

(6) マフムード・カアティは、ソンガイ帝国君主アスキヤ・ムハンマドのメッカ巡礼に同行したソニンケ人とされる。『探求者の年代記』は、実際には、カアティとその親族たちによって一六世紀に書かれた諸記録を元に、一七世紀に同じくソニンケ人の学者イブン・アルムフタール Ibn al-Mukhtar によってまとめられたと考えられている。なお、『探求者の年代記』の正しい書名は、*Ta'rikh al-futūsh*

*fi akhbār al-buldān wa-l-ju'yūsh wa-ākabr al-nās wa-dhikr waqā'i' al-Takrūr wa-'azā'im al-umūr wa-tarīq ansāb al-'abid min al-ahbār* (諸国と諸軍、諸有力者の情報、タクルールでの様々な出来事と大きな諸事の記述、および奴隷と自由人の血統の峻別に関する探求者の年代記) というものである。本書は、ガーナ、マリ、ソンガイの歴史を、一六世紀末のサアド朝によるソンガイ侵略まで記述し、特にアスキヤムハンマド(本文後述)を理想的なムスリム支配者として描く。さらに、その後の研究で、同書がマースィナのフルベ人イスラーム国家を正当化する目的で、一九世紀に改竄されたことが判明した。改竄部分の特定により、書換えの意図が明らかにされた結果、同書は一七世紀以前の歴史だけでなく、一九世紀のジハード運動に関する情報をも含むきわめて重要な史料となったという。同書については、クリストファー・ワイズ Christopher Wise とハラ・アブー・タレブ Hala Abu Taleb による英訳も出ている (Christopher Wise ed., Christopher Wise and Hala Abu Taleb trans., *Ta'rikh al-fittāsh: The Timbuktu Chronicles 1493-1599*, Trenton, N.J.: Africa World Press, 2011)。また、『スーダーン年代記』と『探求者の年代記』の二書をまとめて、しばしばトンブクトゥ年代記と呼ぶ。荻谷康太『イスラームの宗教的・知的連関網』アラビア語著作から読み解く西アフリカ『東京大学出版会、二〇一二年、五一頁・坂井信三』トンブクトゥ年代記』『岩波イスラーム辞典』六九五頁。

(7) 本稿ではアラビア語「仏語共にハリの Librarie d'Amérique et d'Orient Adrien Maisonneuve 社刊、一九八一年版を使用した。以後「アラビア語キリストの典拠は al-Sa'dī, *Ta'rikh al-Sūdān*, p. 〇」と記す。仏語訳は al-Sa'dī, *Ta'rikh al-Sūdān trad.*, p. 〇に記す。

(8) Charles Monteil, "Notes sur le Tarikh es-Soudan, éditées par V. Monteil", *Bulletin de l'I.F.A.N.*, t. XXVII, sér. B, Nos. 3-4, pp. 479-530.

(9) B.A. Ogot ed., *General History of Africa V: Africa from the Sixteenth to the Eighteenth Century*, Paris: Unesco; London: Heinemann Educational Books; Berkeley: University of California Press, pp. 300-326; Maurice Delafosse, *Haut-Sénégal-Niger: L'histoire*, Paris: Émile Larose, Libraire-Éditeur, 1912, t. II, pp. 239-261.

(10) 川田順造「ソンガイ帝国」『新イスラーム事典』三二六—三二七頁・竹沢尚一郎「ソンガイ帝国」『岩波イスラーム辞典』五八八頁。なお、帝国の名は「支配民族ソンガイの名に由来するが、首都ガオの名を以てガオ帝国とも呼ばれる。

(11) J.L. Triand and A.S. Kaye, "Sudan, Blind al-" in H. A. R. Gibb et al. eds., *The Encyclopaedia of Islam*, new edition, Leiden: E. J. Brill, 1960-2002, vol. IX, pp. 752-761; 荻谷康太『イスラームの宗教的・知的連関網』二四頁。

(12) アスキヤ Askya とは、ムハンマドが、総督職にあつ

た時からその称号として用いていたが、一四九三年にスンニ・アリーの子に戦勝し権力を掌握してからは、支配者の称号、および彼が創始した王朝の名となった (Knut S. Vikør, "Askiyā Muhammad", in Kate Fleet et al. eds., *The Encyclopedia of Islam*, three, Leiden: E. J. Brill, 2007, vol. 2018-2, pp.6-8)。一説には、ムハンマドは「故スニ・アリーの娘を嘲笑するために、「彼はもういなら a si tyā」と言ふ、この語を採ったとされる (<https://www.britannica.com/biography/Muhammad-I-Askia>, 二〇一八年二月二六日最終閲覧)。

(13) 『スーダン年代記』その他を用いたトンブクトウの政治社会史研究としては、エリアス・サアド Elias E. Saad による以下の研究がある。Elias E. Saad, *Social History of Timbuktu: The Role of Muslim Scholars and Nobles 1400 - 1900*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

(14) 飯山陽「サアド朝」『岩波イスラーム辞典』三八五頁…私市正年「サアド朝」『新イスラーム事典』二四〇頁…佐藤次高編『西アジア史Ⅰアラブ』三八八―三九一頁。

(15) 宮本正興、松田素三編『新書アフリカ史』一九九―二〇〇頁。

(16) 以下、ヒジュラ暦から西暦への換算については、テキストでユリウス暦が併記されていることから、ユリウス暦で統一し、( ) 内に記した。

(17) スイジルマーサ生まれの知識人であり、スーフィー指

導者(一六一三年没)。マフデー(救世主)を自称し、サアド朝君主アフマド・アルマンスール没後に、君主ムーレイ・ザイダーン(註18)に反乱を起こした(一六一〇―一六一三年)。以下本文では、彼の反乱に関する一連の出来事と、スーダン西部の状況を述べている。cf. Mercedes Garcia-Arenal, *Messianism and Puritanical Reform: Mahfuz of the Muslim West*, Leiden: Brill, 2006, pp.325-351.

(18) アフマド・アルマンスールの息子でサアド君主(位一六〇三―一六二七年)。一六〇三年のアフマド・アルマンスール没後、子の間で権力闘争が始まった。ムーレイ・ザイダーンはマラケシュで王位を主張したが、国内全土は掌握できず、フェスにも政権が誕生した。このため王朝は分裂し、これに呼応してアラブ遊牧民や、アブー・マハリイのような山岳のベルベル人が反乱を起し、国内は無秩序状態となった(佐藤次高編『西アジア史』三九〇―三九一頁)。

(19) テキストでは Kagh、現在のガオ Gao のこと (al-Sa'û, *Ta'rikh al-Sūdān trad.*, p.14)。マリ共和国の中東部、ニジェール川左岸に位置する都市。古くからサハラ縦断交易の要衝として栄え、同地を中心に国家が建設された。サアディーはガオを Kagh (仏語表記では Kagh) ないし Kaw (同 Kā'o) と記すが (Delafosse, *Haut-Sénégal-Niger*, II, p.66)、本稿ではガオで統一した。

(20) テキストでは海 al-bahr とあるが、以下では全て括弧

も付さず、ニジェール川とする。ニジェール川は西アフリカを流れギニア湾に注ぐ河川で、長さは四二〇〇キロメートル。ニジェール川には緩やかな傾斜しかないため、流域の平らな土地にいたると、川の水はあふれ出て広大な氾濫域を形成する。他方で、一年の一定時期に決まって氾濫を引き起こすので、農業や牧畜に最適の環境を形成してきた。ニジェール川の氾濫域のなかでも、もつとも大きくもつとも重要なのが中流域の「ニジェール川内陸デルタ」と呼ばれる湿低地であり、本稿との関係では、ジェンネがこの中に位置する。竹沢尚一郎編『マリを知るための58章』明石書店、二〇一五年、三四―三八頁。

- (21) Ma'Dougou (仏)、Ma'Duguとも表記される。「スルターンの館」を意味するマリンケ語。かの有名なマリ帝国最盛期の王、マンサ・ムサ Mansa Musa (位一三二二年―一三三七年頃)が、メッカ巡礼後にトンブクトゥ郊外の運河の近くに建設したされるが、具体的な場所は明らかになっていない (Hunwick, *Timbuktu*, p.10; Saad, *Social History*, p.37; al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan*, pp.7-8)。本文にある通り、ニジェール川氾濫の際にこの場が度々言及されている。
- (22) al-amin. 原義は「信頼しうる (もの)」。ハンウィックによると、アルマ行政における国庫 bayt al-mal を管理する官吏のこと (Hunwick, *Timbuktu*, p.365)。
- (23) 校訂註によるが、一部の写本の余白には以下の書き込みがあるという。「一六八八年にも人びとは同様のことを

聞いた。雷鳴と地鳴りは激しくなった。そして、同年ムハッラム月二十七日日曜日の正午 (一七五四年一月二日)、木々や家々は揺れ、裂けて崩れ落ち、人びとはその下敷きになって死んだ。」

- (24) 仏訳によれば、ここで「若き」と訳した al-tāwa は通称の可能性があるという (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p.339n)。

(25) 当時、サアド朝には、マスケット (燧発) 銃が導入されていたが、ソングアイ帝国には導入されていないため、両者の軍事力には大きな差があった (佐藤次高編『西アジア史』三九〇頁)。

- (26) テキストには「前の」といった語は付いていないが、便宜上、その時の状態に基づいて、「前の」「新」を断りなく付した。

(27) al-aryaf. テキストにはニジェール川と特定して述べられていないが、ニジェール川だと判断した。仏訳も同様である (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p.340)。

(28) ダンディ Dendi 王朝のアスキヤ (位一六一―一六一八年)。サアディーは、第三七章でダンディ王朝に関する記述でもアスキヤ・アルアミンについて述べ、その治世を称讃している (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan*, pp.311-312)。

- (29) ダンディ王朝の東方境界の総督 (Nehemia Levzion, "The Western Maghrib and Sudan" in Roland Oliver ed., *The Cambridge History of Africa: From c. 1050 to c. 1600*,

Cambridge: Cambridge University Press, 2007, vol. III, p. 445)。

- (30) ホンボリ地方の総督 (Hunwick, *Timbuktu*, p. 341)。
- (31) 仏訳では Kanai は一般名詞だろうとしているが、詳細は不明である (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 341)。
- (32) basitiz, サアド朝の軍人の地位だと考えられ (Hunwick, *Timbuktu*, p. 365; al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 221)。<sup>1)</sup> ホンウィックは第四等としている。
- (33) al-kahya. ホンウィックはこの語をトルコ語起源とし、この役職をバシヤ、カーイドに次ぐ、第三等の軍人とする (Hunwick, *Timbuktu*, p. 366)。
- (34) 仏訳にもあるが、前頁とこれらの文言から、ハンムとユースフはバシヤの称号を採らず、カーイドの称号で満足していたようである。著者サアディーもこの二人にはバシヤの称号を付けずに記述しているため本稿においてもカーイドのままとした。(al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 344n)。
- (35) テキストには kayfama とあるが、文脈から 'indama と同じ意味でとった。
- (36) テキストには Yeba とあるが、仏訳にある通り、この直後の部分では、バンバ Bamba とあるため、こちらに統一した (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 345)。
- (37) サアド朝君主(位一六二七—一六三二年)。前に出てきたスルターン II ザイダーン・ブン・アフマドの子。一般には、アブド・アルマリク 'Abd al-Malik の名で知られる。
- (38) 仏訳にもあるように、モスクや聖者の館 (この) では単なる住居のことではなく、修道場であるザウウィヤを指していると考えられる) がアジールの機能を果たしていると考えられる (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 348n)。
- (39) 仏訳は、サアディーはザンカルについて何も言及しておらず、おそらく長 Fondoko が住民から何かを得る権利、国王特権のようなものとしている (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 349n) が、ザンカル自体は巻末の Index で記されているように地代や税と見なしてよいだろう。なお、モンテイルはこれを Djangal と読むとしている (Monteil, "Notes", p. 523)。
- (40) テキストでは誰を指すのか明確ではないが、仏訳では、サンコーレ族の長とされている (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 349n)。
- (41) ニジェール川中流域、ジェンネの西に位置する。
- (42) 仏訳は、この黒いテントをトゥアレクやムーア人が用いる皮製のテントとし、「黒い」と訳した al-suwada' を「たぐさんの」という意味かもしれないと指摘する (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 352n)。
- (43) 以下、著者は同地の長について、スルターンの称号を用いている。
- (44) 仏訳より、両期が始まったことを意味する (al-Sa'di, *Ta'rikh al-Sudan trad.*, p. 353n)。
- (45) 仏訳は、このコンゴマウを、儀礼上、直接人びとと話

すことのない君主の言葉を伝える役職としている(21  
Sa'di, *Ta'rikh al-Suldan urad*, p.354n)。

(46) 現アルジェリア中南部に位置するオアシス地域。サハラ交易の中継地点。

(47) トンブクトゥを代表する知識人アフマド・バーバー Ahmad Bābā (一六二七年没)の子(一五六四年没)。

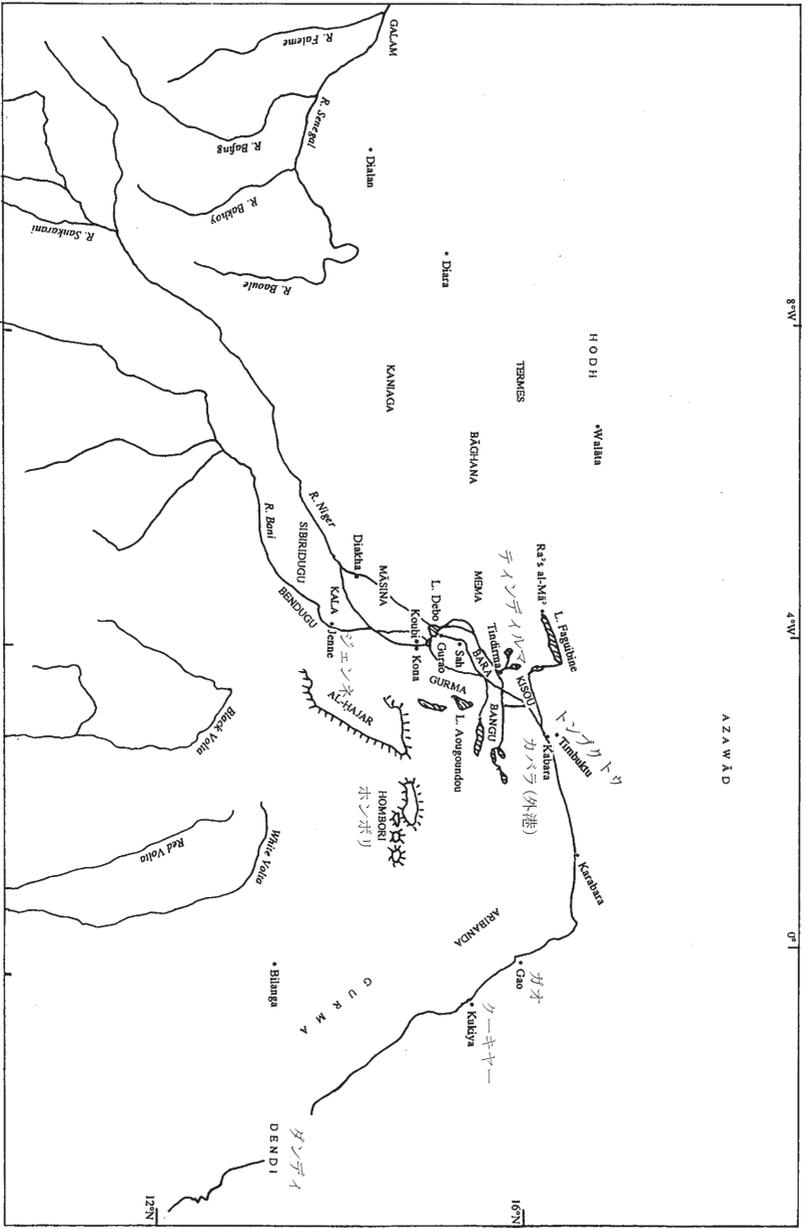
謝辞

本稿の執筆に当たり、時代背景や術語について篠田知暁氏(日本学術振興会特別研究員ED)より多大なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

内田あかね(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻一九九九年入学、故人)、野口舞子(お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー)

	任期(ヒジュラ暦)	本文頁
アリー・ブン・アブド・アッラーフ・アッティリムサーニー	1021年シャアバーン月15日-1026年ラビーウ第一月5日(4年10ヵ月)	220-221
アフマド・ブン・ユースフ・アルウルジー	1026年ラビーウ第一月5日-1027年ラジャブ月(1年4ヵ月)	221-223
アンマール(※マラケシュから派遣され、アフマド・ブン・ユースフと重複)	1027年ラビーウ第一月末-1027年ジュマダー第二月	222-223
ハッド・ブン・ユースフ・アルアジュナースィー	1027年ラジャブ月-1028年ムハッラム月末(7ヵ月)	223-224
ムハンマド・ブン・アフマド・アルマーッスィー	1028年ムハッラム月末-1030年ズー・アルヒッジャ月19日(2年11ヵ月)	224-225
ハンム・ブン・アリー・アッダルー	1030年ズー・アルヒッジャ月19日-1031年ラビーウ第一月16日(3ヵ月)	224-226
ユースフ・ブン・ウムル・アルカスリー	1031年ラビーウ第一月16日-1036年シャアバーン月20日(5年5ヵ月)	225-227
イブラーヒーム・ブン・アブド・アルカリーム・アルジャラーリー	1036年シャアバーン月20日-1037年シャアバーン月末(1年)	227-228
アリー・ブン・アブド・アルカーディル	1037年ラマダーン月4日-1042年ムハッラム月3日(4年5ヵ月)	228-230, 232-237
アリー・ブン・ムパーラク・アルマーッスィー	1042年ムハッラム月3日-	236-237

表 本稿で扱うトンブクトゥのバシヤとその任期  
( )の任期は本文による



地図 16世紀のニジェール中流域 (John O. Hunwic, *Timbuktu and the Songhay Empire*, Leiden: Brill, 1999, p.359 に加筆)

【追記】 訳者内田あかねさんのこと

三 浦 徹

本訳は、内田さんが遺したアラビア語年代記『スーダン年代記』の日本語訳の遺稿をもとにしたものである。

内田さんは、一九九五年四月にお茶の水女子大学文教育学部史学科に入学し、九九年三月に卒業した。九六年から文教育学部全体の改組により、史学科も人文科学科比較歴史学コースに改組（改称）したため、最後の史学科の学生である。

イスラーム史を専攻し、卒業論文（「ガーナ王国からマリ王国期における王とイスラーム物質文化からの考察」）では、西アフリカに登場したイスラーム国家についてアラビア語の地理書を用い交易を主題として検討した。九九年四月に大学院人間文化研究科人文専攻（博士前期課程）に入学し、引き続き西アフリカのイスラーム化をアラビア語史料を用いて研究することとした。当時日本では、西アフリカについては、文化人類学者の研究はあっても、アラビア語史料を用いた歴史研究はなされておらず、未踏の地を歩むこととなった。

他方で、一九九九年九月には、学術創成研究「イスラーム地域研究」プログラムの国際研究集会として、「奴隷のエリート Slave Elites in the Middle East and West Africa」を開催することになり、西アフリカ近代史を専門とするフィリップス John Philips 氏（弘前大学助教授、当時）と私が企画運営者となり、アフリカ史を専門とする米国の研究者や坂井信三氏の参加をえた。内田さんも、この集會に目をかがやかして参加した。

翌二〇〇〇年には、お茶大が交流協定を締結したばかりのロンドン大学アジア・アフリカ校（SOAS）への留学が内定した。しかし、その春に腸に癌があることがわかり、手術をうけた。本人は、病を直し、修士論文を書き、留学にでると

いう意志を持ち続けていた。一月に入院先を訪れたとき、点滴の器具をつけながらも、修士論文の主題であるソングイ帝国の統治について語っていた。しかし、同年一月二十五日に帰らぬ人となった。自宅のある熊谷市での葬儀には、同級生はもとより、大学院のイスラーム史の先輩たちが集まり、新井由紀夫先生も出席された。

四十九日の法要をすぎて、ご自宅にうかがったところ、ソングイ帝国の基本史料である『スーダン年代記』の全訳がノート三冊に残されていることがわかった。ノートには、訳文が、一行あきで、しっかりとした字できっちり記されており、単なる草稿ではなく、一見して清書であることがわかった。当時日本では西アフリカ史の研究や史料も限られていたことから、内田さんの訳稿をお茶の水史学に掲載したいと考え、ご両親からアラビア語の原本や仏語訳、英語訳など内田さんの遺品をお預かりした。なお当該史料の入手については、黒木英充氏（現東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）のご配慮をいただいた。

二〇〇〇年の大学院演習では、このアラビア語テキストを読むことにした（参加者は中村妙子、太田啓子、阿久津正幸）。しかし、私たちには当時の歴史や地理についての基本知識がないため、頓挫した。その後、私自身が、学部や大学の行政職につき、多忙な生活が続いたため、刊行計画は停止してしまっていた。

昨二〇一七年度に、学部の卒業論文として西アフリカの交易をテーマにする学生（喜古萌さん）が現れた。喜古さんはアラビア語は未習であったため、内田さんの訳稿と英訳書を貸与したところ、ソングイ帝国崩壊後の交易の状況に興味をもって、論文を仕上げた。これがヒントになり、ハンウィックの英訳書で省略されている当該時期（第三章以降）を掲載することを考えた。おりしも、マグリブ史を専攻する野口舞子さんが博士学位をえて、一八年度からお茶大のリサーチフェローとして勤務することになった。野口さんが、この時期の西アフリカとモロッコの関係にも興味があるということ、内田さんの訳稿の点検（修正・補筆）作業を引き受けてくれた。私が行政職にあるため、退職が定年より一年延びたことも幸いした。こうして、この「中東・イスラーム研究特集号」に、大学院の同期入学者である嶺崎寛子さんや先輩・

後輩の論考とともに、内田さんの渾身の遺稿を一部とはいえ、刊行できることになった。遺稿や遺品を長期間にわたって貸与くださり、出版についても快諾をくださったご両親内田千之様、伸子様に変更して御礼を申し上げたい。

内田さんが亡くなったときから、私が心中ひそかに銘じていることがある。それは「生きて研究ができるということ、ありがたいことだ」ということである。研究は、いくら努力してもよい結果がでないことや、公私の事情で妨げられることもある。癌という病に侵されながらも、初志を貫き、歩むことをやめなかった内田さんのことを思うと、自然に背筋が伸びてくるのである。

内田さんとのつきあいは、あまりにも短かく、万事に控えめであったせいか思い出はあまり多くない。同期生の近藤優子さんと対照的で、二人はとても仲が良いライバルだった。三年生の一二月日光への歴代最小規模の学科旅行（学生わずか七名）に毅然として参加した強者のひとりだった。四年生の六月に私がシリアに学会出張するときに、内田さんがアラブ女性が着る服を買ってきてくれないか、と珍しくおねだりをした。ダマスクスの市場で刺繍のはいった長衣を買って渡したところ、とても喜んで、すぐに着替えて現れた。行動的な一面を知るとともに、そのときの嬉しそうな顔は鮮やかな記憶となっている。